

〔直訳〕

- 45 そして すぐに 彼は強いた 彼の弟子たちに 乗り込むことを 舟の中へ
そして 先に行くことを 向こう岸の中へ ベトサイダへ、
間に 彼が 解散させる 群衆を。
- 46 そして 別れを告げて 彼らに 彼は立ち去った 山の中へ 祈るために。
- 47 そして 夕方に なって あった 舟は 海の真ん中に、
そして 彼は 独り 陸の上に。
- 48 そして 見て 彼らが 苦しめられているのを 漕ぐことの中で、
なぜならあつた 風が 逆で 彼らに、
ころ 第四の 夜警時間 夜の
彼は来る 彼らのもとへ 歩きながら 海の上を
そして 彼は望んでいた 通り過ぎることを 彼らのそばを。
- 49 だが見た者たちは 彼が 海の上を 歩いているのを
思った 次のことを 幽霊が いる、そして 絶叫した。
- 50 なぜならすべての者は 彼を 見た そして狼狽した。
だが彼は すぐ 語った 彼らと共に、そして 言う 彼らに、
「あなたがたは勇気を出しなさい、 私 である。
恐れているのを止めなさい」。
- 51 そして 彼は上がった 彼らのもとへ 舟の中へ
そして おさまった 風が、
そして とても 「非常に」 自分自身の中で 彼らは正気を失っていた。
- 52 なぜなら彼らは理解しなかった パンのことを、
そうではなく あつた 彼らの 心は 頑固にされて。

〔新共同訳〕

- 45 それからすぐ、イエスは弟子たちを強いて舟に乗せ、向こう岸のベトサイダへ先に行かせ、その間に御自分は群衆を解散させられた。46 群衆と別れてから、祈るために山へ行かれた。47 夕方になると、舟は湖の真ん中に出ていたが、イエスだけは陸地におられた。48 ところが、逆風のために弟子たちが漕ぎ悩んでいるのを見て、夜が明けるころ、湖の上を歩いて弟子たちとこの行き、そばを通り過ぎようとされた。49 弟子たちは、イエスが湖上を歩いておられるのを見て、幽霊だと思い、大声で叫んだ。50 皆はイエスを見ておびえたのである。しかし、イエスはすぐ彼らと話し始めて、「安心しなさい。わたした。恐れることはない」と言われた。51 イエスが舟に乗り込まれると、風は静まり、弟子たちは心の中で非常に驚いた。52 パンの出来事を理解せず、心が鈍くなっていたからである。

① 並行箇所と比較（マタ一四22―33、ヨハ六15―21）

①a 弟子の反応

⑦ マタイ福音書では、「恐れることはない」と言われた。ペトロは水の上を歩こうとして沈みかけ、イエスに助けられる。その出来事の後、舟の中にいた人たちは「本当に、あなたは神の子です」と言つて、イエスを拝む。

① ヨハネ福音書では、イエスが弟子たちを向こう岸へ行かせるのではなく、弟子たちが自分たちで湖畔へ下りて行き、カファルナウムへ向かおうとする。さらに、湖の上を歩くイエスを見て、弟子たちは恐れるが、「幽霊だと思った」とは書かれていない。「わたした。恐れることはない」という言葉の後では、落ち着いてイエスを舟に迎え入れようとしている。

①b 湖の上を歩くイエスの動き

⑦ マタイ 14章25―26節

夜が明けるころ、イエスは湖の上を歩いて弟子たちのところに行かれた。弟子たちは、イエスが湖上を歩いておられるのを見て、「幽霊だ」と言っておびえ、恐怖のあまり叫び声をあげた。

① ヨハネ 6章19節

二十五ないし三十スタディオンの漕ぎ出したころ、イエスが湖の上を歩いて舟に近づいて来られるのを見て、彼らは恐れた。

⑦ マルコ 6章48節

マタイとヨハネでは、イエスは弟子たちを目指して湖の上を歩いて行く。しかし、マルコでは、イエスは弟子のもとへ向かうが、そのまま弟子のそばを「通り過ぎよう」としている。イエスの動きはマタイやヨハネには描かれていない。

② 構成

②a 45―46節

イエスは弟子たちを「舟の中へ」強いて乗り込ませた。他方、イエスは群衆を解散させた後、祈るために「山の中へ」立ち去る。山は祈る場所、神と出会う場所である。弟子は神と共にあるイエスから離された状態。

②b 47―50節

イエス独りが陸に留まっている。イエスは弟子の窮状を「見て」、彼らのもとへと歩き、通り過ぎようとした。イエスが海の上を歩くのを「見た者たち」は狼狽する。イエスの真の姿を見取ることができずに恐れる弟子たちに、イエスは「勇気を出しなさい」と語りかける。

②c 51―52節

イエスは「弟子たちのもとへ、舟の中へ」上がる。イエスが弟子たちのそばに来る。風は止み、弟子たちは心の中で正気を失うほどに驚く。弟子たちはパンに関して理解せず、心が頑固にされていた。

③ 弟子たちを強いて舟に乗り込ませる（45―46節）

①a ガリラヤ地方を宣教するイエスや弟子にとって舟は欠かせない移動手段であるが、それだけではなく、湖畔の群衆に教えるイエスが腰を下ろす場所であり、説教台の役割も果たす（マコ四1）。

また、弟子がイエスのしるしを体験する舞台でもある（マコ四36）。また、舟はこの世を渡る教会を表す象徴としても用いられる。その舟に弟子たちが乗ることをイエスは強制する。ここでは舟は三つの段落に用いられており、イエスが誰であるかを弟子たちが知るための場となる。

④ イエスは通り過ぎることを望んでいた（47—50節）

① 「夕方になって」「第四の夜の夜警時間」

時間を表す表現が47節と48節に用いられている。パンの奇跡は「時間もだいぶたった」とき行われた。そこには「夕方」という言葉はないが、「多くの時が生じて」（直訳）という表現によって暗示されている。聖書では、夜の闇は神の顕現への伏線となる。ローマの習慣に従って、夕方6時から朝6時までを四等分して、夜警時間を表した。「第四の夜警時間」は午前3時から6時を指している。明け方は神が救いの手を指し伸べる時刻（イザ一七14。詩四六6参照）。

② 「舟は海の真ん中であつた」

⑦ 旧約聖書では、「海」は神の創造の力に敵対する原初の水、混沌と結び付いている。従って、象徴的には、「海」は神の力に敵対するあらゆる力を表すと見ることが出来る。「舟」によって表された教会は「海」の中を行く。神に敵対する力が猛威をふるう場が「海」であるから、舟はなかなか進まないということが起こる。この「海」に対して、イエスが独りで立ち去った「山」が対置されている。

① 旧約聖書では神の力は、カオス（混沌）の象徴である海を支配する力と考えられている。神は原初の海を分けて大地を創造し（詩二四2）、紅海を分けて民を渡らせる。湖の上で逆風に漕ぎ悩む弟子たちの姿は、詩編やヨナ書に描かれた船乗りたちの苦難を思い出させる（詩一〇七23—32、ヨナ一1—16）。そうした苦難の中で、彼らは海を静める主の力の大きさを体験する。紅海をイスラエルの民が渡るという出来事が起こった時刻もほぼ、イエスが湖の上を歩いた「第四の夜警時間」である（出一四24 a「朝の見張りのころ」）。湖の上でイエスは、海の高波を踏み碎き（ヨブ九8 b）、水の中を通るときも共にいると約束する主の姿を現す（イザ四三1—13）。

③ 「彼は望んでいた 通り過ぎることを 彼らのそばを」

イエスの行動を表す動詞を取り出すと、「見て 来る そして望んでいた」となる。イエスは弟子たちが湖の真ん中で漕ぎ悩んでいるのを「見て」、弟子たちのもとへ向かったのだから、彼らのそばを「通り過ぎる」のは不思議である。しかし、それはイエスが「望んでいた」ことであり、イエスの意志である。

⑦ 「通り過ぎる」と訳されるパレルコマイは、文字通りには「そばを通る・通り抜ける」を意味し、転義して「過ぎ去る・なくなる」の意味で用いられる。並行箇所のマタイ14章25節では、「彼は望んでいた 通り過ぎることを 彼らのそばを」を省いている。

① 旧約聖書では神の顕現が「通り過ぎる」という語で表されている箇所がある。

出エジプト記33章21—23節

「見よ、一つの場所がわたしの傍らにある。あなたはその岩のそばに立ちなさい。わが栄光が通り過ぎるとき、わたしはあなたをその岩の裂け目に入れ、わたしが通り過ぎるまで、わ

たしの手であなたを覆う。 わたしが手を離すとき、あなたはわたしの後ろを見るが、わたしの顔は見えない。」

列王記上 19章 11節

主は、「そこを出て、山の中で主の前に立ちなさい」と言われた。見よ、そのとき主が通り過ぎて行かれた。主の御前には非常に激しい風が起り、山を裂き、岩を砕いた。しかし、風の中に主はおられなかった。……火の後に、静かにささやく声が聞こえた。

このような旧約聖書の用例から考えると、マルコは「通り過ぎる」を「通過する」の意味ではなく、「顕現する」といった意味を込めて使っているのだと思われる。

④ 「勇気を出しなさい」

「勇気を出す」と直訳した動詞は、名詞サルソス〈勇気〉からの派生語。恐れや不安がなく「元気でいる・安心している」の意味。新約聖書の7回の用例はどれも命令形で、恐れや不安にとらわれた者を慰めたり、励ますイエスの言葉に使われる。ファラオの軍隊が後ろに迫ったとき、怯えるイスラエルに(出一四13)、またシナイ山での神の顕現が、雷鳴や稲妻や角笛という恐れを引き起こすしるしと共に起こったときにも、モーセは民に同じ言葉を語っている(出二〇20)。

⑤ 「私である」

申命記32章39節に見られるように、旧約聖書は神の顕現を表す定型句として「アニー・フィー〈私はそれである〉」を用いる。この句は七十人訳旧約聖書では「エゴ・エイミ〈私である〉」と訳されているが、ここではこれが用いられている。これは、人に姿を顕した神が、自分が神であることを表明するための表現である。

⑤ 神として顕現したイエス (51―52節)

① 「とても」「非常に」 自分自身の中で 彼らは正気を失っていた

弟子たちは風が静まった後も混乱している。ここに用いられている動詞は「驚く・不思議に思う」よりもさらに強い意味合いがあり、「正気を失う・困惑する」を意味する。マルコが描く弟子は、イエスが誰であるかを最後まで理解できない人々である。弟子たちがひどく困惑したのは、「パンの出来事を理解せず、心が頑固にされていた」からである。

② 五千人に食べ物を与えた出来事を見た弟子たちが、イエスこそ命の糧をもたらす方だと気づいていたなら、自分たちのそばを通り過ぎるイエスを見たとき、そこに神の顕現を感じ取ったはずである。マルコが描く弟子たちはまだイエスの本質に気づいてはいない。

③ 一方、マタイは「彼は通り過ぎることを望んでいた」を削除したうえに、舟から湖上へと出て行った。ペトロを描き、弟子たちにイエスへの信仰を告白させている。マタイの興味は弟子たちの姿を描くことにある。湖上のイエスのもとに行きたいと考え、舟から出て行ったペトロは弟子たちの典型である。彼らは「信仰の薄い者」たちであるから、恐怖に襲われ沈みかけてしまうが、しかし、マルコとは違って、イエスを「本当に、あなたは神の子」と告白することができる。

④ マルコもマタイも同じ出来事を描いている。しかし、マルコは神として顕現したイエスに焦点を合わせ、マタイは弟子の現実に焦点を合わせている。見る視点が違えば、このような違いが現れてくる。